平成15年度　学術研究助成報告

「相愛国文」による日本文化総合研究

鈴木　徳男

本研究は、短期大学日本語日本文学科で長年発行していた『相愛国文』という研究誌の〈場〉を継承し、本学に関わる教員を中心に、共同の討議を持ち、それぞれのテーマを設定して研究会を実施し、その成果を公に問おうとするものである。

本学「春曙文庫」は、田中重太郎先生旧蔵本を中心として、本学ゆかりの蔵書なども含めた貴重資料であり、既に図書館より『春曙文庫目録』の刊行をみている。今回の研究においては、春曙文庫収蔵本に関わる研究を各自おこない、研究会での討議・検証を行った。それと同時に、短期大学名誉教授柿谷雄三先生ご所蔵本の悉皆調査をもう一つの柱とした。柿谷文庫には、枕草子古写本など、本学春曙文庫蔵本との関わりも指摘できる資料がある。近世後期の国学者自筆資料なども数多くご所蔵で、中々その位置付けを果たすに難しいものである。従前『相愛国文』誌上でも、そのご蔵書の一端は報告がなされているが、今回の研究では、そのデータ化（目録作成）を目指し、討議を行った。

幸い特別研究申請者の鈴木の他に、鳥井正晴・橋本雅之・山本和明（以上、本学教員）、若生哲（相愛高校教員）などの参加を得た。今後も基礎的な成果を継承し、更なる考察を行いたいと思う。

『一遍聖絵』、一遍と時宗教団史の研究

砂川　博

『一遍聖絵』研究は、2000年4月の『時衆文化』の創刊、2002年の『一遍聖絵の総合的研究』（岩田書院）を契機として急速に進んだ。「『一遍聖絵』の論点（続）」（拙著『一遍聖絵研究』岩田書院、2003年）は、この5年間の研究による成果の総括と展望を記したものである。

筆者は、こうした最近の成果を踏まえ、「踊り念仏をめぐる和歌問答」（『時衆文化』第8号、2003年10月）では、延暦寺僧重豪と一遍の踊り念仏をめぐる応酬の史実性を問い、「聖戒の一遍遊行随行について」（『時衆文化』第9号、2004年4月）では、聖戒が一遍の遊行に随行した可能性の高いことを論証し、「鎌倉遊行－『一遍聖絵』を読み直す（3）－」（『時衆文化』第10号、2004年10月）では、一遍の鎌倉入りの援助者として安達泰盛が想定でき、一遍や随行の非人を描く絵が詞に相違することなど、鎌倉遊行にかかわる種々の問題点を指摘し、幾つかの新見を掲げた。さらに、「一遍と地蔵信仰」（前掲『一遍聖絵研究』）では、一遍にとって各地の地蔵霊場が教線拡大に不可欠であったこと、それはまた鎌倉極楽寺を拠点としつつ、地蔵信仰を媒介として関東一円に勢力を拡大していた忍性ら律宗教団との競合、相克をうみだしたものとし、知られざる初期時衆教団史の一面に光を当てた。

近世戯作の明治期享受史研究

山本　和明

従来より、近世戯作が如何に近代に至って流通し、読まれていたかを探る試みを継続研究してきた《拙稿「近代〈批評〉における漢文体の位置－馬琴受容をめぐっての一試論－」『国文論叢』18号：「近世戯作の〈近代〉」『近世と近代の通廊』双文社出版：「『小説神髄』の周縁」岩波新古典文学大系明治編月報8》。本研究は、その一連の研究の中でも、近世期に貸本屋を主たる流通経路として読まれた「読本」というジャンルを中心に、明治期に如何に享受されたかを考察しようとするものである。時代を明治に変え、書籍としての形態を版本から活版本へと変容するなかで、多くの蔵書家を生んだ。書物が個人の手に容易にわたることになったのである。新興書店は、従来のように版木を譲り受け、刷ることではなく、活字を組み印刷するという、新本同様の手続きを余儀なくされた。そしてその組まれた活字は解体され、再び受容次第で組み直されている。その意味で近世戯作と云えど、新たな異本を生み続けた時代だったのである。その異本の調査を主な課題として実施した。

こうした戯作本を蒐集し所蔵する公的機関は少ない。国文学研究資料館の仕事に携わるなかで知りえた情報を手がかりに、公的機関への調査を実施し、研究の基礎的な土台造りを果たすこととなった。その成果の一端は、『文学研究』第91号に「京伝読本の〈明治〉－明治二〇年以前－」という題で論文発表を行っている。今後継続し、明治二〇年代以降の調査を続けていく予定である。

平成15年度　演奏会助成報告

オペラ「こうもり」フランク役に出演

米田　哲二

演奏会タイトル：関西二期会第58回オペラ公演
J. シュトラウスⅡ世作曲「こうもり」
日　時　：2003年5月24日
場　所　：アルカイックホール
指　揮　：阪　哲朗
演　出　：加藤　直
オーケストラ　：京都市交響楽団

J. シュトラウスⅡ世作曲「こうもり」はオペレッタの最高傑作で、ウィーンでは毎年大晦日と元旦に上演されている。同時代、パリで活躍していたオペレッタ作曲者オッフェンバックの作品「天国と地獄」のブラックユーモアと比べ「こうもり」は人情味溢れるユーモアがあり、まさにウィーンの良き時代を彷彿とさせる作品である。（しかし、この作品を作曲している1873年はかのブラック・フライデーから銀行倒産、中産階級市民の破産、経済システムの崩壊が始まった年でもある。）洒落たウィンナワルツ、ポルカで溢れたこの喜歌劇は音楽的才能のあるリヒャルト・ジュネーという台本作家の力もあり、作品の構成は完璧な仕上がりとなり、その独創性は万人の認めるところである。

以前、「こうもり」ではファルケ役に出演したことがあるが、今回、監獄長フランク役を演ずるにあたり、まず、フランクがこのドラマの登場人物中どのような位置づけであるか、いかなる人生を歩んで現在の監獄長という職を得たか、またその仕事振り等々を考えることから始めた。

いざ稽古が始まると、演出家加藤氏の台詞の短さが気になり（2幕、3幕のアイゼンシュタインとの掛け合い）人物像を明確にできず、少々迷いながら、いろいろな角度からその人物像を作り上げようと試みた。ところが、稽古を重ねるうち、次第に加藤氏の台詞の持つリズム、スピード感、テンポの良さが心地よくなり、登場人物のおりなす喜劇性が身体で感じ始めた。

登場人物たちはそれぞれの個性を発揮し始め、加藤氏の求めるドラマに近づきつつ本番を迎えた。その結果、今回の「こうもり」は前回の上演には見られなかった、テンポ感の良い、歯切れのあるドラマを作り上げた。

加藤氏のリズムとテンポ感を重要視した演出が今回の成功を導いたのだが、指揮者阪氏が叙情性とリズム感にすぐれた歯切れの良い音楽を京都市交響楽団と共に創り上げたことも成功の大きな要因である。

最後に今回の演出家、加藤　直氏の演出コンセプトを演出メモより下記に引用する。

『恐らく異国ロシアから来たオルロフスキー殿下は自分たちの世界・貴族の階級がじきに消滅することを知っているに違いない。そしてその後に資本の論理を小わきに抱えて市民ともブルジョワとも呼ばれる者たちが台頭してくることを。そしてさらに百年が過ぎて21世紀が始まる頃その市民は自分たちが作り出した近代を持て余し途方に暮れたまま新しい世紀に乗り出すであろうことを。だがその彼もそうした百余年をドタバタ喜劇のように笑いとばし結局“生きる喜び”を手にするアデーレたちのしたたかさまでには思いが至らないらしい。

まずは“オルロフスキーの退屈”を想像することから始めてみるのはどうだろう？（異文化について考える）　そして《梁塵秘抄》に見る後白河法皇の歌謡大夜会にも匹敵するかもしれない彼主催の舞踏の会。カーニヴァル。そこでは“お祭り”が約束する嘘や仮装や性を超越する乱痴気や制度を笑い飛ばす無礼がワルツやポルカを踊るはずだ。従って最終幕は当然牢獄。この作品は時代と共に新しい視点を強いるしぶとくも人間的なオペレッタなのだ。・・・と認識することから、まずは・・・』